

水浅葱の夏

画像アプリふとみたら
ずいぶん前の
「この日の思い出」として
おそらく南の島
プライベートで訪れた海岸

水浅葱の海 夏の日に
砂の上に風 滑ってた

波打ち際 遠い記憶
心のどこか そっと撫でてゆく

そっと思い起こすあの日の感情
楽しい時間やがて過ぎる
砂浜の匂いどこか優しくて
触れられたくないところにまで

波は光をのせて寄せてきては
足首に触れては流れて
歩くたび足跡が
水に溶けて消し去ってゆく

水浅葱の海 夏の日に
砂の上に光 映っては消える

波打ち際 遠い記憶
心のどこか そっと撫でてゆく

そっと思い起こすあの日の笑顔
楽しい時間やがて過ぎる
遠くの島影 眠る獣のように
その日の終わり見守っている

夏の日の目覚め

まだ起きたくはない
朝早く目覚めた夏

二度寝で見た夢
心にのこる
どこか寂しい
どこか懐かしい

硝子の向こうに映る
夏がゆっくりとはじまって
川は陽を抱いている
鉄橋今くぐり抜けてゆく

川の上を赤い列車が

まだ起きたくはない
朝早く目覚めた夏

小さな扉
心に響く
どこか寂しい
どこか懐かしい

赤い列車が渡りゆく
列車の音 遠くの山が
風が少しだけ笑う
その音を優しく返して

誰もいない朝の時間に

まだ起きたくはない
朝早く目覚めた夏
夏の日の始まりに
やわらかに抵抗する

どうして気づいた時には

どうして気づいた時には
そこには誰もいなくて
遠くの後ろ姿を
呼び止めることもできず

ついさっきまでいたあなたの
微かな温もりも消えてゆく

用意していた言葉も
置き忘れたままに
取り返すには
あまりに遠く

どうして気づいた時には
何かを追い求めている
誰かがくれた囁き
受け止めることもなくて

ついさっきまでいた誰かの
気配の名残が漂ってた

小さな空洞の中
胸の奥に残ってる
取り戻すには
あまりに遅く

ついさっきまでいたあなたの
微かな温もりも消えてゆく

用意していた言葉も
置き忘れたままに
取り返すには
あまりに遠く

断捨離

ときめくものないから
すっきりしたいから
無理をしないところで手放してみよう

ものすごく好きでも
大切でもないものは
わからなくなる前に手放してみよう

霧が晴れるような気持ち
味わってみたい
だから何もかもが煩わしくなって

本当の自分知りたくて
はっきりするために
もっと確かなものどこにあるのだろう

忘れてしまいたい
身軽になるために

複雑な毎日に
とらわれることもなく
無理をしないところで片付けてしまおう

ものすごく好きでも
嫌いでもない人は
別れてしまう前に離れてみよう

たくさんの思い詰め込んで
生きることできない
過去に縋る気持ちも断ち切ってゆきたい

守るべきもの知りたくて
確認するために
気高い生き方を見つけてゆくん

いつかはサヨナラが来る
怖さをなくすために

忘れてしまいたい
気軽になるために

流れる景色

放射線に広がる
窓から流れる景色
両脇の緑の視界に
白い筋が光ってく

この夏最後
遠出の道を
運転席で揺られて
明日で終わる
休みの最後
ハンドル握りしめて

どれだけ走っても
この瞬間やがて消える
こんなにさみしくても
その思い通り過ぎる

空とおんなじ道の白さが
最後の暑さこの身焼きつける

助手席と後ろの席
静かで動いてない
一人つけるワイヤレスホン
手探りのモバイル光る

色々あった
今年の夏も
それぞれの思い出に
明日からまた
離れ離れの
息子も疲れ眠る

どれだけ走っても
この瞬間すぐに終わる
こんなにさみしくても
その思い通り過ぎる

少し弱まる空の日差しが
最後の暑さフェイドアウトに

アサギマダラとヒヨドリバナ

「もう行くよ」とアサギマダラ

ヒヨドリバナの房 微かに震わせ

風の縁でたたむ羽の中
いくつもの光
その色は遠い空の
色を帯びてた

「ここに咲くあなたの香りは私の旅の道しるべ
だった」

「遠くへ行けばもう届かないでしょう」

ヒヨドリバナうつむき 細く影伸ばして

白い房をかすかに揺らして
届かぬ手のように

アサギマダラ答えず
ただ風を吸い込む

「この香りを最後の記憶に」

鮮やかな羽 空へ溶けゆく

「その羽のどこか 私の香りが」

残ってること静かに願う花

少し冷え込んだ初夏から

少し冷え込んだ初夏の
雨の日々は通り過ぎて
隠れてた本当の夏
確かにやってきた

厚手のTシャツでしばらく
過ごしてきた日々と共に
時折ひんやりとした
感覚どこにもなく

この空から落ちる光が Ah
薄い雲を突き抜けてくる

ダブル台風がいくつか
通り過ぎてゆくたびに
雲がたくさん吹き飛ばされ
蒸れた風流れくる

街を一気に強い光が Ah
夏の色にサッと塗り替え

この空を支配する光が Ah
あの涼しさ遠い記憶に